

〈研究ノート〉

## 教職志望学生の教育実習に関する準備意識調査

柿内真紀

### Survey of Teacher Trainee Students' Perspectives on Preparation for Teaching Practice KAKIUCHI Maki

#### 1. はじめに

開放制の教員養成を担う鳥取大学では、現在、地域学部、工学部、農学部の3学部が教職の課程認定を受けている。主免の教育実習は農学部が4年生、その他の学部では3年生で始まる。3学部共通の教育実習前後の教職カリキュラムは必修科目からみると、図1のように組まれている。教職免許状取得希望学生は1年次後期に教職履修登録（以下、教職登録）をし、4年次の「教職実践演習」に向けて、「教職ポートフォリオ」をスタートさせることとなる。

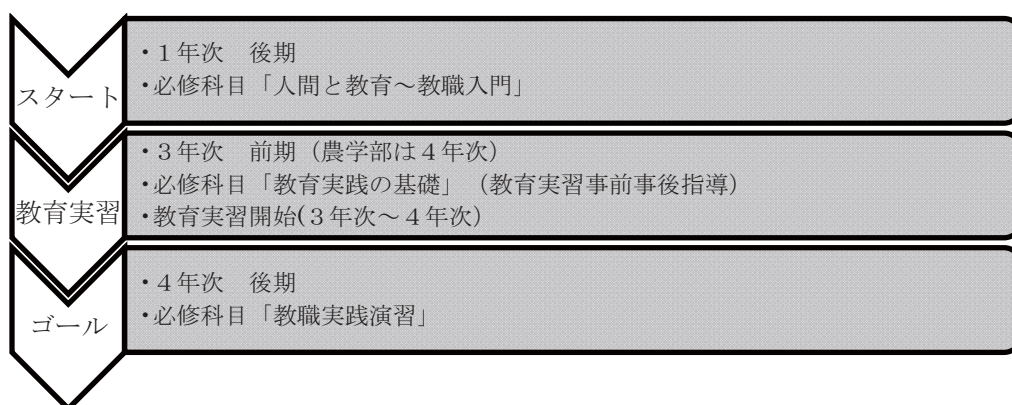


図1 教育実習前後の必修科目

さて、本稿は、教職登録学生が教育実習のときに、授業実践、生徒や指導教員、実習生どうしのコミュニケーション、日常生活管理などについて、どの程度自信を持っているのかを質問紙調査から読み取ろうとするものである。そして、読み取れた傾向を、教育実習への準備にとどまらず、今後の教職志望学生への支援や、教職カリキュラムの編成の手がかりとすることを目的とする。なお、本調査は2014年度に試みとして実施したものであることから、本稿では単純集計結果のみ用いている。今後は質問項目などの調整が必要である。

#### 2. 調査結果

##### (1) 調査対象者の属性

調査は、「教職ポートフォリオ」の作成支援のために2年次前期に教員養成センターが実施している教職ポートフォリオのチェック期間（2014年5～6月）および、3年次前期の「教育実践の基礎」（図1）の授業内（6月12日実施）で配布・回収した。なお、前者の場合、期間中に個別面談をおこなう際に調査を実施していることから、5～6月に順次配布・回収となって

いる。本稿では、前者を2年次グループ、後者を3年次グループとする。また、地域学部のうち、地域教育学科は当学科の入学者の多くが教員志望であるため、他学科と区別して集計した。

回答者数は、2年次グループが187名、3年次グループが94名であったが、2年次グループには教職履修の開始の遅れなどの理由から2年生以外が5名(うち無回答1名)、3年次グループにも教育実習の時期のちがいなどの理由から3年生以外11名(うち無回答1名、誤記とみられる回答1名)が含まれている。性別でみた結果が表1である(以下、図表中の「2」は2年次グループを、「3」は3年次グループを指す)。なお、農学部の3年次グループは回答者数が3人と少ないため、以下の図には示しているが、傾向を読みとる際には対象としない。

表1 学部別回答者内訳(性別)

|           | 男          | 女          | 無回答      | 総計         |
|-----------|------------|------------|----------|------------|
| <b>2</b>  | <b>102</b> | <b>84</b>  | <b>1</b> | <b>187</b> |
| 地域教育学科    | 17         | 29         | 1        | 47         |
| 地域学部      | 22         | 29         |          | 51         |
| 工学部       | 48         | 13         |          | 61         |
| 農学部       | 15         | 13         |          | 28         |
| <b>3</b>  | <b>53</b>  | <b>41</b>  |          | <b>94</b>  |
| 地域教育学科    | 19         | 29         |          | 48         |
| 地域学部      | 10         | 11         |          | 21         |
| 工学部       | 21         | 1          |          | 22         |
| 農学部       | 3          |            |          | 3          |
| <b>総計</b> | <b>155</b> | <b>125</b> | <b>1</b> | <b>281</b> |

表2 取得希望の免許状(学校種別・複数回答)

|     |        | 幼  | 小  | 中   | 高   | 特支 | 回答者数 |
|-----|--------|----|----|-----|-----|----|------|
| 2年  | 地域教育学科 | 16 | 36 | 19  | 14  | 14 | 47   |
|     | 地域学部   | 2  |    | 40  | 45  |    | 51   |
|     | 工学部    |    |    | 36  | 59  |    | 61   |
|     | 農学部    |    |    | 17  | 27  |    | 28   |
|     | 小計     | 18 | 36 | 112 | 145 | 14 | 187  |
| 3年  | 地域教育学科 | 16 | 38 | 14  | 8   | 11 | 48   |
|     | 地域学部   |    |    | 21  | 21  |    | 21   |
|     | 工学部    |    |    | 13  | 20  |    | 22   |
|     | 農学部    |    |    | 1   | 3   |    | 3    |
|     | 小計     | 16 | 38 | 49  | 52  | 11 | 94   |
| 総合計 |        | 34 | 74 | 161 | 197 | 25 | 281  |

(2) 教職希望

図2, 図3は教職にどの程度就きたいと考えているのかを尋ねた結果である。地域教育学科の教職希望だけが3年次グループでは弱まっている点が顕著である。前述のように, 地域教育学科は入学時点では教職志望者が多い学科であり, それは学科自体が地域のキーパーソンとしての小学校および幼稚園(保育士を含む)教員の養成を学科コンセプトに掲げている所以でもあるが, 学年進行にともない, 将来像が具体化することが背景に考えられる。他学部(地域教育学科以外の地域学部を含む。以下同じ)は逆の傾向を示しているが, これもその背景は教員養成を主眼としない学部に入學したが, 将来像が具体化することによって教職志望が強くなったと考えられ, どちらも教育実習前に実際に教職に就くかどうか具体化しつつあると言える。

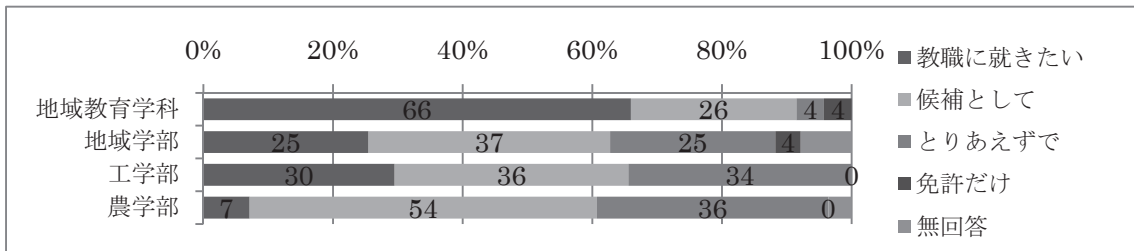


図2 教職希望の程度 (2年次グループ)

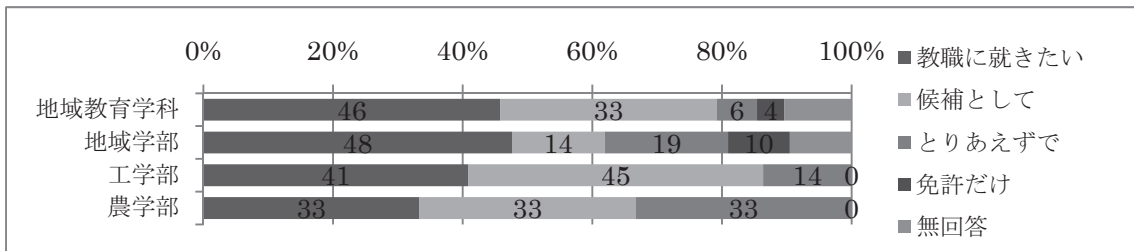


図3 教職希望の程度 (3年次グループ)

(3) 担当教科の授業に対する自信

図4, 図5は担当教科の授業に対する自信について尋ねた結果である。全体的として2年次グループのほうに自信があるとする傾向が強い。2年生から3年生にかけて, 教職関連科目および専門科目の履修済み授業が増えることや, 授業自体のレベルもあがることから, 学習が深まり, あらたな課題も見つかり, それらが謙虚な自信の捉えにつながっているのかもしれない。また, どちらのグループも地域教育学科の自信の低さが顕著である。特に「全然自信がない」の回答割合が多いことが気になる点である。3年次では地域学部も同じ傾向がある。背景には, 教育実習での担当授業科目につながる科目を大学での専門科目として持たない点が他学部とのちがいとしてあるとも言えよう(たとえば, 工学部の数学や理科)。

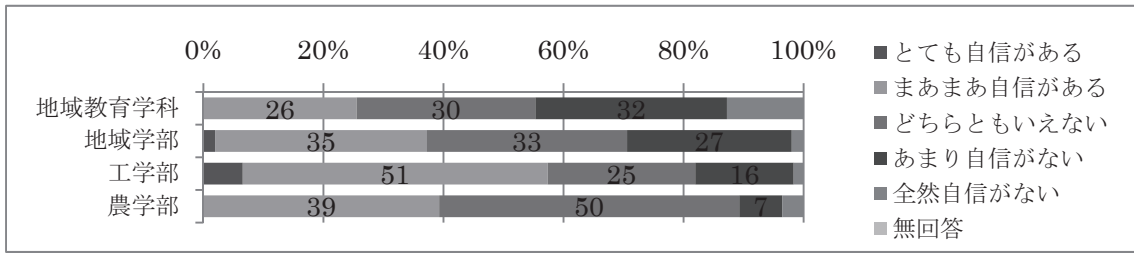


図4 担当教科の授業（2年次グループ）

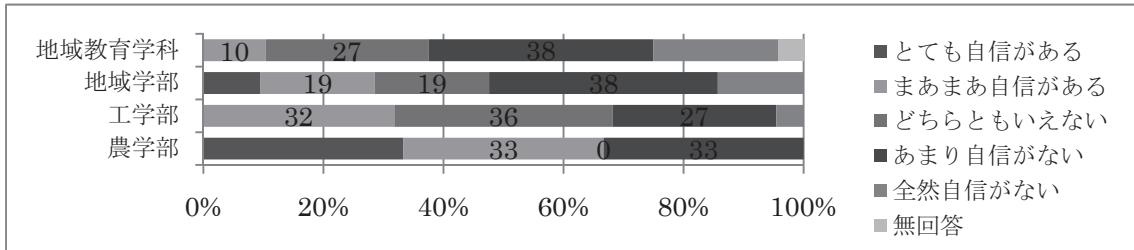


図5 担当教科の授業（3年次グループ）

(4) 教科以外（道徳を含む）の授業に対する自信

図6, 図7は教科以外（道徳を含む）の授業への自信について尋ねた結果であるが, 上記の担当教科の授業と同じ傾向（3年次の謙虚な自信の捉え）が, 2年次グループと3年次グループの間にみられる。地域教育学科は, ここでは担当教科の場合ほど他学部との差はない。

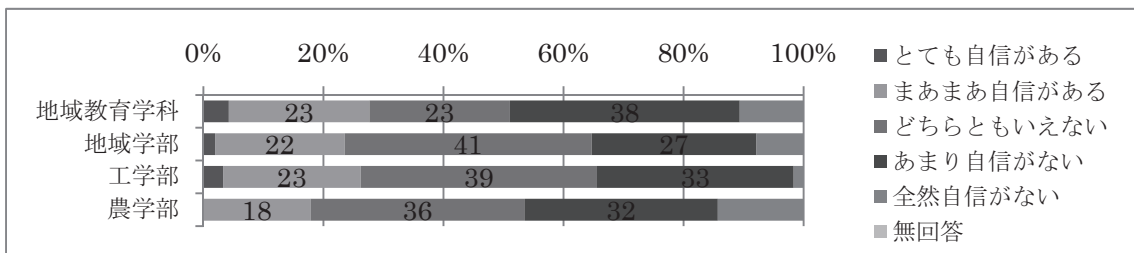


図6 教科以外の授業（2年次グループ）

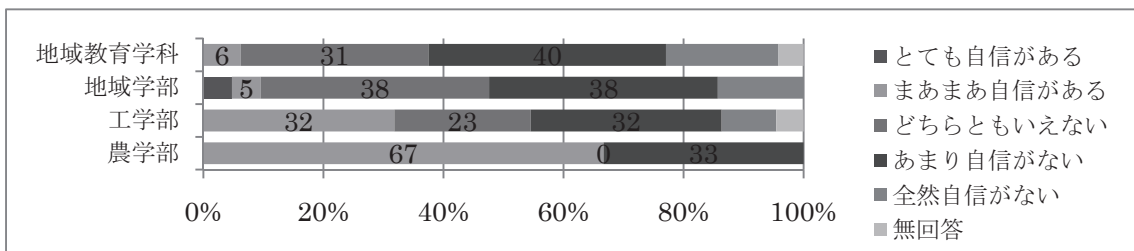


図7 教科以外の授業（3年次グループ）

(4) 児童・生徒の理解に関する知識への自信

図8, 図9は児童・生徒の理解に関する知識があるのかどうかについての尋ねた結果である。2年次グループでの地域教育学科の自信の低さが目立っているが, 3年次になると他学部との差は小さくなる。全体の傾向として, 上記(2)(3)の授業関連よりも「全く自信がない」の回答割合は少ない。

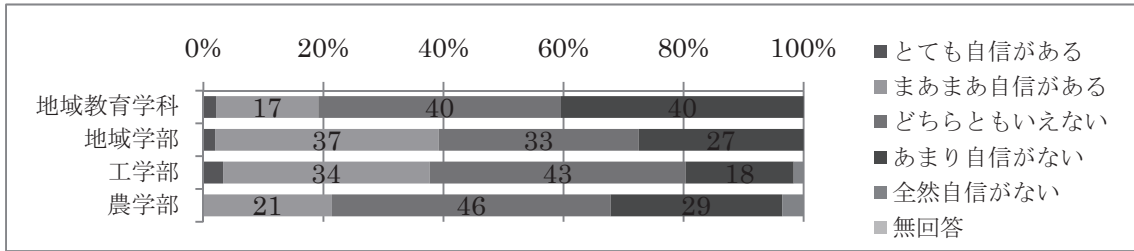


図8 児童・生徒理解の知識 (2年次グループ)

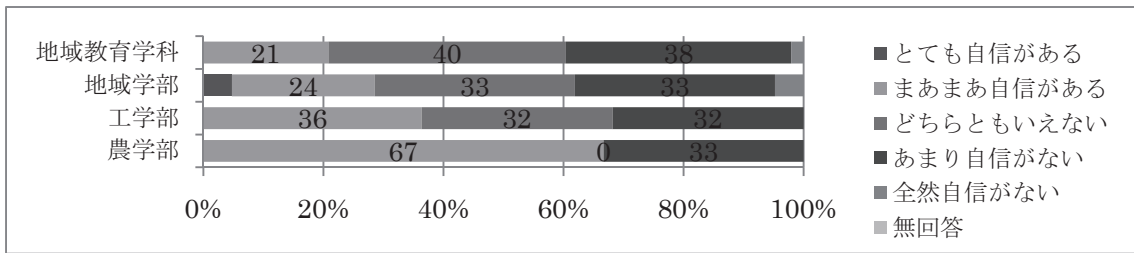


図9 児童・生徒理解の知識 (3年次グループ)

(5) クラス運営, 生徒指導の自信

図10, 図11はクラス運営, 生徒指導についての自信を尋ねたものである。3年次グループは, 教育実習が迫り現実味を帯びるためか, 2年次よりも自信のある割合が少なくなるが, 地域教育学科はあまり変わらない。「全然自信がない」の回答割合が上記(4)の児童・生徒理解に関する知識の場合より多い。

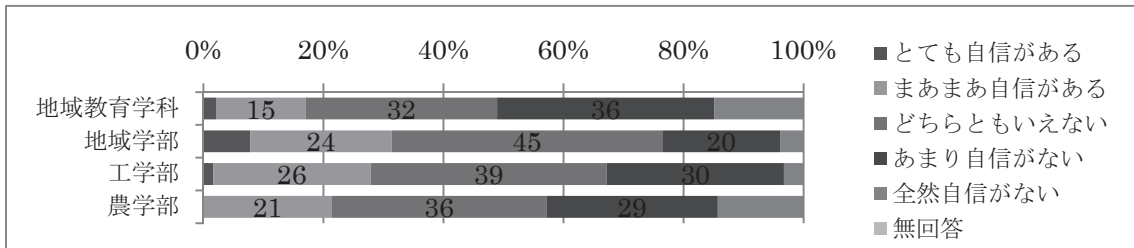


図10 クラス運営, 生徒指導 (2年次グループ)

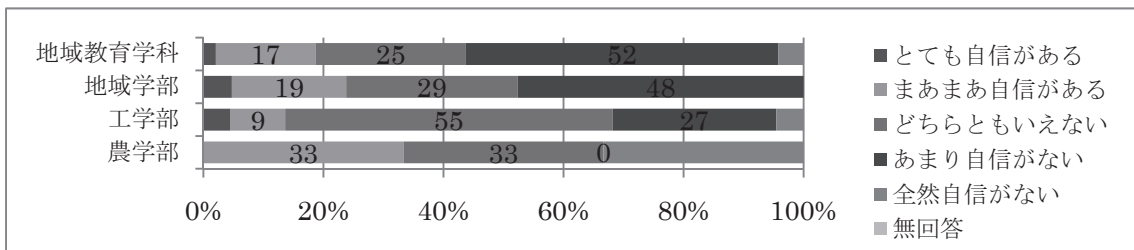


図11 クラス運営, 生徒指導 (3年次グループ)

(6) 対人コミュニケーションへの自信

図12~17は, それぞれ, 「児童・生徒」, 「指導教員」, 「実習生どうし」のコミュニケーション

ョンについての自信を尋ねた結果である。「児童・生徒」、「指導教員」とのコミュニケーションは、上述の教科指導やクラス運営、児童・生徒指導よりも全体的に自信がある傾向が出ている。「とても自信がある」の回答割合が多い点に特徴がある。ただし、同時に、「指導教員」との場合、地域教育学科の2年次と3年次グループの両方、地域学部の3年次グループの自信のない割合が多いことには注意が必要であろう。また、気になるのは「実習生どうし」の場合となると、自信のある割合が他の2つに比べるとかなり少ない点である。青年期の同世代とのコミュニケーション構築の視点からの考察とともに、教員としての同僚性の構築の点からも注目しておきたい点でもある。

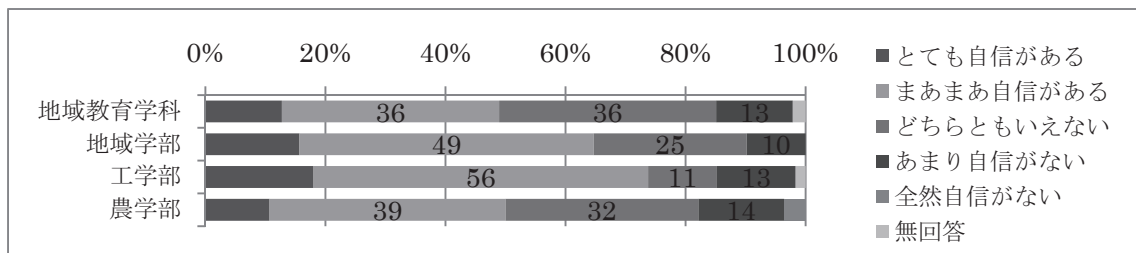


図 1.2 児童・生徒とのコミュニケーション（2年次グループ）

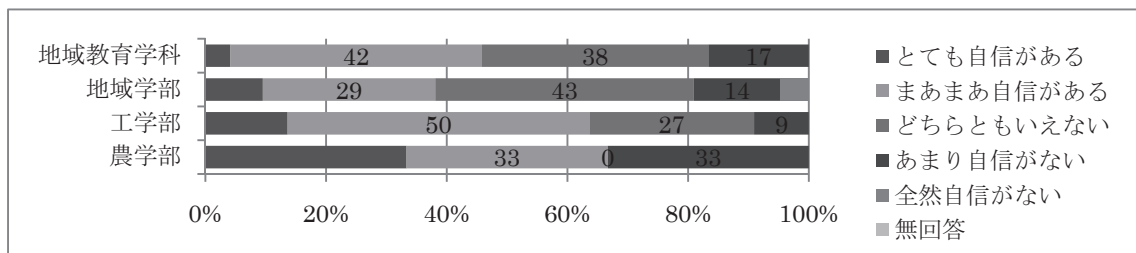


図 1.3 児童・生徒とのコミュニケーション（3年次グループ）

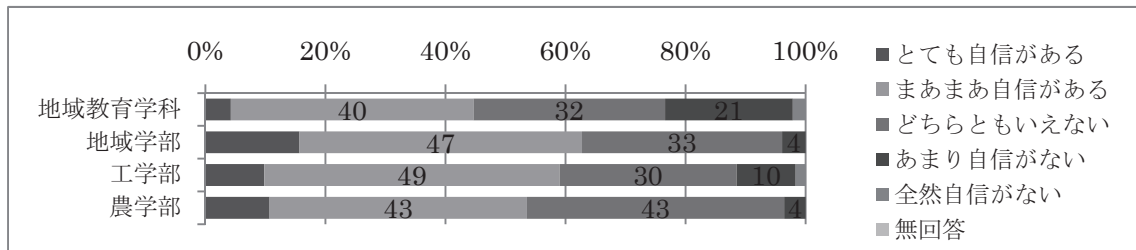


図 1.4 指導教員とのコミュニケーション（2年次グループ）

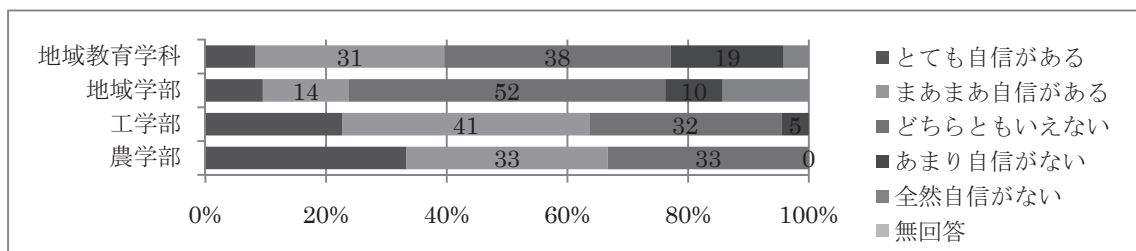


図 1.5 指導教員とのコミュニケーション（3年次グループ）

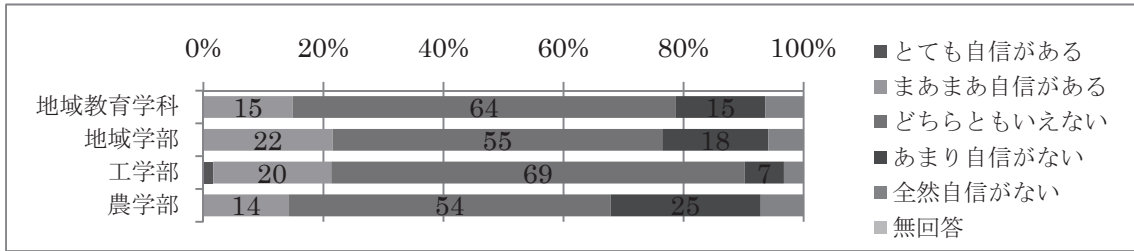


図16 実習生どうしのコミュニケーション (2年次グループ)

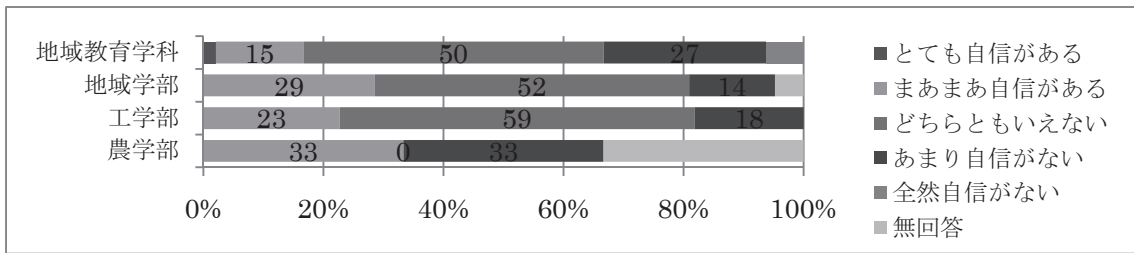


図17 実習生どうしのコミュニケーション (3年次グループ)

(7) 毎日の生活管理 (起床・出勤, 食事など)

図18, 図19は教育実習期間中は通常の大学生活とは異なる生活管理が必要となるが, そのことについての自信を尋ねた結果ある。おおむね自信がある傾向がみられるが, 一方で「自信がない」回答が一定割合あることには注意が必要だろう。

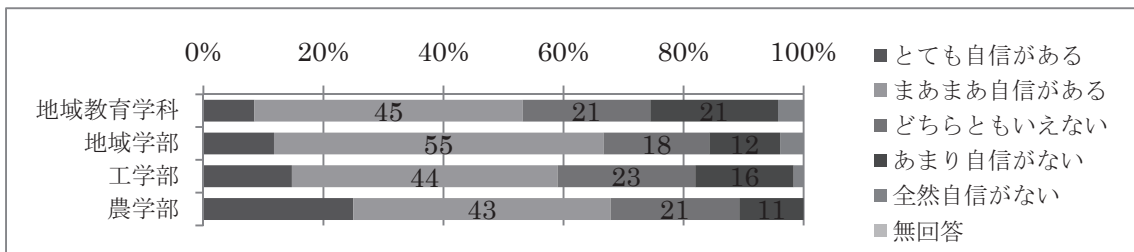


図18 生活管理 (2年次グループ)

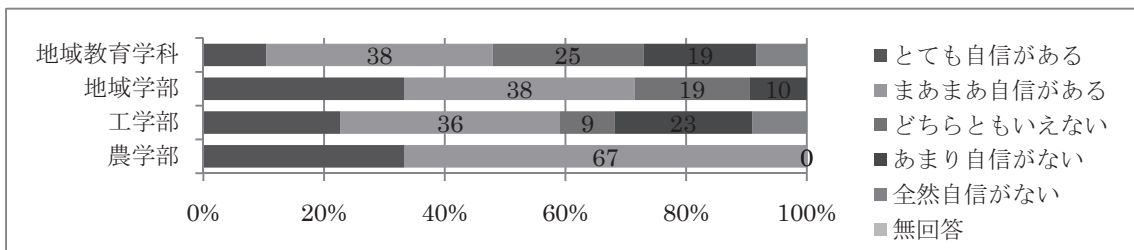


図19 生活管理 (3年次グループ)

(8) 自分なりの目標

図20, 図21は教育実習に自分なりの目標を持って臨むことができるかについて尋ねた結果である。この質問がすべてのなかで最も自信のある結果となっている。授業担当やクラス運

営等に自信はなくても、自分なりの目標を各自が立てて教育実習に向かうというポジティブな姿勢がみられる。

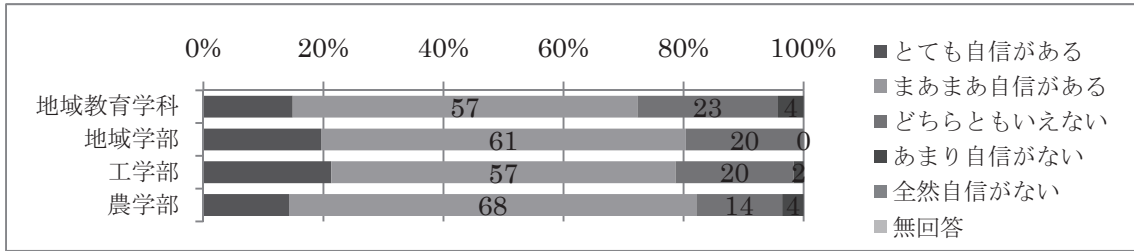


図 20 自己目標（2年次グループ）

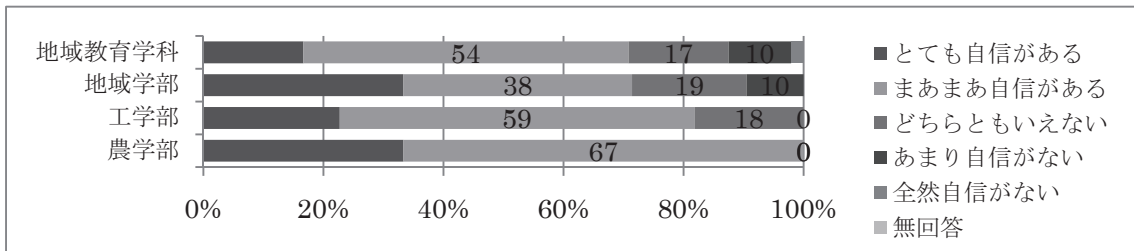


図 21 自己目標（3年次グループ）

### 3. おわりに（今後の課題）

以上、単純集計結果から傾向を読みとってみた。冒頭で述べたように、本調査は 2014 年度に試みとして実施したものであるため、今後は質問項目の調整が必要である。たとえば、「発達と教育の心理学」（全学共通科目，1 年次以上）、「生徒指導の心理学」（2 年後期担当科目）、「子どもの理解と発達相談」（3 年後期担当科目）、「ガイダンス論」（3 年前期担当科目）といった、関連する教職関連授業科目の配当年次と履修の有無と自信の関係や、2007 年度から継続している教職志望者の意識調査と相互分析ができる質問項目などである。さらに、地域教育学科と他学部とのちがいに注目した分析も必要となる。

また、4 年次後期の「教職実践演習」など教育実習後にもアンケート調査を実施することで、養成段階の教員志望学生の全体像を捉えることも次年度以降の実施課題である。得られた全体像から、教職関連授業科目以外で、「学び・遊び・つくるープロジェクト」（教員養成センターで今年度実施、詳細は本誌特集を参照）などを含めた教職カリキュラムを構築することや、教員養成センターでおこなっている教職相談をさらに活用していくことを次の目標としたい。

同時に、中央教育審議会教員養成部会によるとりまとめ報告『これからの学校教員を担う教員の在り方について』（2014 年 11 月）で示された養成分野の課題や、地域（たとえば鳥取県）で必要とされる教員像、日本の教員の状況を比較調査からみることができる OECD による国際教員調査 TALIS（Teaching and Learning International Survey：国際教員指導環境調査）の結果などから、鳥取大学で目指す教員養成の方向性を導き出すことも考えられる。

（注記）質問紙調査の集計は大谷直史（教員養成センター）の協力を得ている。

柿内真紀（鳥取大学大学教育支援機構・教員養成センター）